

殉節婦人の事蹟

然るに戦争開始以來敵の振舞を見聞くに、世のこと知らぬ妾等を驚かしたること多かりき、西兵は敵にこそあれ何れも武士なれば、武士らしき振舞すべしと思ひたるに、罪なき民の家を焼き其の財寶を奪ひ取り其の婦女子を姦する等、自ら王師官軍と稱しながら、聊も民を弔ふの狀なく全く草賊の如くなれば、自ら警戒せざるを得ざりき、先づ第一に心にかゝるは優子の君の事なりき、中野の三人の君は、何れも容貌世にもすぐれて麗はしかりしが、殊に優子の君は齡十六世にも稀なる美人にておはしければ、如し萬一敵の俘ともなり賜はんには、いかなる耻辱を受け賜はんも計り難く、兎ても運を開くべき軍ならねば、妾等同志の人々の命を致すの日も遠からまし、かたみに手を取りて死出の山を踰えんと、兼ねて誓ひたれども後れ先だつは束の間なれば、今自



會津白虎隊 十九士傳

付殉節婦人の事蹟

宗川虎次著 山川健次郎補修 會津弔靈義会刊

勇猛、壯絶、悲哀、無念、美談
白虎隊員及び殉難女性の個々に
ついて世に紹介した唯一の文献



に喜び是より人が其の通稱つうしやうを呼んでも應へなかつたと云ふ、
 平常餘り用ひないけれども、儀式ぎしき（ぎしき）等の折などに使用する名乗、即ち實名とあつた、通稱は誕生間もなく命名せられ、長じて變ずることもあり、又變ぜざることもあつた、名乗は稍々長じて命名せられた、維新後名を一ツにすべき令があつた、依て通稱、實名の内一ツを選択せんたく（せんたく）することゝなつた。稍々長ずるに及び、武術に熱心し、殊に砲術を善くし、夙つとに銃丸製作所に入りて其の業を學んだ、戊辰の役白虎二番士中隊に編入せられ、八月二十三日石菰口いしむぐちが守りを失ひ、猪苗代城むすしほじやうも亦陥り、敵、將に若松城下に入らんとすと聞いて、朝餐あさめしがまだ畢らないに、出陣しゆつちんの支度したくをそこ／＼にし、脚絆きゃはんを兩脚に穿うがつに及ばず、ツト蹶起けつきし銃を把とつて馳はせて出た、母君脚絆半足を携たづへ、追ひかけて諏訪すわ通りどほ花畑はなはた口より郭内に入り、米代を横貫する道路で、永瀬に至つて、漸く追ひ付いて片足を著つけさせた、其の僕も亦辨當を背負ひて後を追ひかけてきた、時に君既に隊長日向

氏の邸やしきに至り、速に出戦しやうと促うながして居た、少時ありて衆漸く聚つた、こゝに於て隊伍たいごを作り、容保公に隨つて瀧澤に向ひ、進んで戸の口に往つて奮戦したけれども、衆寡敵せず終に飯盛山で死んだ、年十六。

雄次君かねて出陣の用意に、母君に請うて草色の洋服を作つて貰つた、草色は即ち綠色である、蓋し山野に於て戦争するに、草木の葉と其の服裝と、彩色を同一にすれば、敵の注目ちゆうもくを避けて、狙撃そげきせられる患うれいを少くするに足る譯である、其の用意の周到なること感心の次第である、君に姉君があつた、出陣の朝、乾栗、大豆、胡桃、松葉を盆に盛り首途かみちを祝ふた、蓋し乾栗はかち栗と訓し、大豆はまめ、胡桃はくるみ、松はまつと呼ぶ、故に是は戦ひ勝ちて其の恙つがなく歸り來るを待つまつの義に取つたのである

補修會津白虎隊十九士傳

補修會津白虎隊十九士傳

る、我が國の風習古よりかやうにしたものである、君そこで皆様の御志は誠に辱かたじけないことであるが、今日はこの御餞おんはなげを頂く場合でないと思ふと、一つも喫たべないで辭して去つた、之を以ても死を決して出陣したことが分る。

君の兄の雄介君は、伏見の變に當り、大砲隊頭林權助に従つて砲戦し、砲彈が盡きて槍を揮つて躍り進んだが、敵丸其の胸を貫いて斃れた、年二十である、一家から二人の殉難者じゆんなんしやを出せるは光榮と云ふべきである。

丈之助君戊辰の役に、公命を奉じて水戸に使ひに往つたが、歸途捕へられて獄に繋つながれた、一夜大風雨で四面暗黒咫尺あんどくしも分らぬ位であつた、因つて君獄丁を欺あざむいて曰ふに、余は明朝青天白日の身となりて、出獄しゆこくを許さるゝこと必定ひつじやうである、故に是迄お世



『補修会津白虎隊十九士伝』復刻に寄せて

元会津史談会会長

畑 敬之助

一、もう一つの白虎隊と少年武士

そもそも白虎隊といえ、飯盛山で自刃した十九人ばかりが突出して有名になったが、実はそれは白虎隊の一部に過ぎない。

会津藩の正規軍歩兵隊のなかで、年齢別が一番若いものを白虎隊と言ひ、十六、七歳である。上級士族の子弟の隊を白虎士中隊しちゅうと言ひ、中級士族のそれを白虎寄合隊よあひ、同じく下級士族のそれを白虎足輕隊と言つた。各級の士中・寄合白虎隊は二隊ずつあつて、一番隊二番隊と呼ばれた。

世上有名な飯盛山での自刃白虎隊員十九人は、士中二番隊所属である。

次に各種白虎隊の活動面に目を向ければ、足輕隊はいまひとつ掴めないが、士中二番隊が八月二十二日に白河口・戸ノ口原へ出陣して飯盛山の悲劇に至つたことは、周知の通りである。士中一番隊は藩主を護衛して越後戦線を視察、その後は籠城戦に参加した。

ここで特記すべきは寄合白虎隊のことである。この集団は早くも七月十二日に出動命令が下り、一、二番隊計百六十人が越後口戦線に投入された。そして八月初めからは先輩諸隊に交じつて実戦に入り、二十六日新潟県津川つが撤退後は喜多方方面、さらには九月十五日以降の籠城戦にも転戦参加し、三十一人の犠牲者を出した。本書はこの事実をも正面からとらえて記述する。今日飯盛山の白虎隊士の墓は、正面に自刃十九士が眠り、参拝者の足はそこに集中するが、実は右手の三十一基の墓こそ、隠れた勇者・寄合白虎隊士のものである。本書が「君国に殉じたる烈士」と讃える「もうひとつの白虎隊」がそこに眠っている。

ところでこの戦いには、白虎隊の名は冠せられないけれども、さらに「白虎隊の仲間」とも称すべき人々がいた。年端が十六歳としはに達しないため白虎隊に入れなかったり、その他の事情で白虎隊とは別行動をして殉じた少年たちである。本書にはこの勇敢な少年たち五十九人を一項目にまとめて記してある。なお「会津弔霊義会」は平成十三年十一月、自刃白虎隊士墓の左隣りに、その後の調査により三人を追加して合計六十二人とし、「少年武士慰霊碑 白虎隊外戦死者十四歳より十七歳」なる慰霊碑を建てて供養を始めた。

二、自刃白虎隊士、十九人すべての横顔

さて古来、戊辰戦争関係の文献資料は汗牛充棟ほどあり、うち会津人による名著も、このたびマツノ書店から復刻される『七年史』（北原雅長著 明治三十七年刊）をはじめ『京都守護職始末』（山川浩著 明治四十四年刊 平成十六年マツノ書店復刻）、『会津戊辰戦史』（山川健次郎監修 昭和八年刊 平成十五年マツノ書店復刻）、『会津戊辰戦争——白虎隊・娘子軍・高齢者之健闘』（平石弁蔵著 大正六年刊）等がある。でも残念ながら大著に過ぎて、「もうひとつの白虎隊」や「少年武士」のことは行間に散見させるに終っている。他方その後、「白虎隊」を書名に掲げる著書も多く出たが、いずれも隔靴搔痒かつかさうようのそしりを免れない。

本書は手前勝手な一本釣りではなく、多少類型的手法で、これら十九人のすべてと生き残つた飯沼をもふくむ白虎隊員の横顔を、可能な限り詳細に紹介している。その内容は「生い立ち、家族の系譜、文武の諸業、儒教的徳目基準の人柄、日常的・非日常的行為、首途における別離の態様、戦場風景、携帯武器、各種服装、封建制人事の問題、生死の狭間」等々にわたる。それらを通じて隊士相互間のみならず、帰納的に当時の時代背景が浮かびあがつており、さらに現代の若者と比較するのも非常に興味深い。

三、会津の女性、「今は！」の選択

日本の武家社会では女性は一見隷属を強いられてきたようにみえる。しかしここ『殉節婦人の事蹟』にみえる婦人の姿はそれだけではない。本書の百五十頁以下の叙述は、かなり悲壮的ではあるが、そのこと

を示す。ここでは、会津女性が「今は」の際にどのような死に方を選んだかにより、ふだんの生き方の中に高貴な思想と教養があったことを垣間みせてくれた。女性の純粋さ・一途さ・勁さはナイーブで美しい。これからの男女共社会にも残したいものである。

最後に、本書の著者・宗川虎次は、戊辰戦後の明治四年に会津藩士一八六人を率いて北海道に渡り、余市の開拓を成功させた、元砲兵隊長・宗川茂友の次男である。虎次は生来足の病で歩行不自由のため、茂友は明治十一年、九歳の虎次を連れて会津へ帰郷した。虎次は刻苦勉勵のすえ漢学・儒学の教師として自立し、私塾を開いた。教えを乞う者ひきもやらず、門前市をなしたという。彼の学殖の深さは、今日その撰文にかかる諸種記念碑が、会津一円に二十数基現存することでも立証できよう。

ところで本書執筆の動機は、虎次が帰郷後のあるとき、家宝とされていた穂積朝香描く「白虎隊十九士自刃の図」（自刃の図第一号）にいたく感動したことによる。以来彼は遺族を訪ね、涙と共に事の詳細を聴き、東西に史実を求めて本書を書き上げたのである。

小冊子ながら、宗川虎次が畢生の情熱をかけ、山川健次郎が画竜点睛とも言える見事な「補修」をおこなったこの労作。ぜひご感得を乞いたい。

■復刻に際して、B 6判変形の原本を、A 5判変形に拡大しました。「内容見本」でもおわかりの通り、特に「割注」を読み易くするためです。

■今回は「装幀・毛利一枝」です。白虎隊の殉死を追悼するにふさわしく、清楚な外函に画の写真を手貼りするなど、小社の「廉価版」にしては多少の手間をかけております。

■本書は大正十五年以来毎年のように版を重ねておりますが、このたびの原本は、最も流布していると思われる昭和七年発行の第六版です。

■本書は福島県内すべての公共図書館へ献呈致します。

■この機会に、同時復刻の「七年史」とセットでご予約下さい。

■体裁	A5判変形上製輸入 二六〇頁
■定価	四、四〇〇円（税込・送料別）
■予約特価	三、三〇〇円（送料別）
■特価締切	平成十八年七月二十日（厳守）
■発売	八月下旬
限定五百部復刻	
▼書店不卸	▼送料別
山口県南市銀座2-13	▼送料別
0964-840119	
マツノ書店	
URL: http://www.matsuno-shoten.com	

（セット特価は申込ハガキをご覧ください）

— 2 —

會津白虎隊

任に當つてゐた際であれば、勝軍山から這入つて來た敵軍を防ぐ兵が甚だ乏しい、然し最善を盡す目的で、上田新八郎の第二奇勝隊 兵數詳かでないが、百二十人外に『奇正隊農兵坂内八三郎等七八十人を率ゐて云々』と若松記草稿にあれども、奇兵制改革の後、農兵を募つて編成したるものだが、兵數は詳かでない。辰野勇の敢死隊六十人、正隊は奇勝隊の誤りだと云ふ説があり、正奇隊だと云ふ説もあるが、正奇隊は當時東方面に出てゐた。を戸の口原に出した、此の奇勝、敢死の二隊は、數週間前に農工商より募集した兵で、精神上の訓練もない上、鐵砲の撃方さへ知らないものが多かつた、二十二日俄に諸役所の役人共を以て編成した、小池繁次郎の遊軍寄合組は、其の數七八十人もゐたらう、是れも亦戸の口へ出張した、此等四隊の人々の持つてゐた武器は、槍又は火繩銃で、洋銃を持つてゐる者は極少數であつた、右四隊の外白虎二番士中隊三十七人を遣つて、戸の口を防禦する任に當らせた。

抑々白虎隊 會津藩では慶應四年三月兵制を改革し、十六歳十七歳の者を以て白虎隊を、十八歳より三十歳迄の者を以て朱雀隊を、三十六歳より四十九歳の者を以て青龍隊を、五十歳以上の者を以て玄武隊を編成した、白虎（西）朱雀（南）青龍（東）玄武（北）は、支那の傳説に據る四方の神の名である。は會津藩士の妙齡なる子弟を以て組織し

白虎隊の説明を兼ねて次頁冒頭の2行を添付
（山川健次郎述 巻頭解説より）